

34 保育士を対象とした幼児吃音に関する経験と知識の調査

研究所 感覚機能系障害研究部¹ 病院 第三診療部²

酒井奈緒美¹、森浩一^{1, 2}

【はじめに】

幼児期に発症する吃音は、その発症率が5～8%と比較的高い一方、治癒率も7～8割と高いことが報告されている(Yairi & Ambrose, 2013)。我が国では「そのうち治る」と考えられ特別なサポートがなされないことも多いが(菊池, 2012)、海外では幼児期に発症した吃音児を数年追跡調査した研究において、吃音が維持しやすいリスク要因がいくつか報告されている(Yairi & Ambrose, 2005, Ambrose, Yairi, Loucks et al., 2015 他)。一方、近年我が国でも、言語聴覚士が幼児期早期に介入することで、発話症状の軽減・消失が可能であることが報告されている(大沼ら, 2010)。このような背景から、持続のリスク要因を見極め、それらを有している幼児、あるいは支援を必要としている親・子に、適切な時期に適切なサポートを提供する体制づくりが必要と考えられる。幼児吃音への適切な支援体制を確立することを目指し、まずは幼児が多く時間を過ごす保育現場の実態について調査を行ったので、その結果を報告する。

【方法】

調査対象：A市、B市にある3つの保育園に勤務する保育士48名

調査時期：2015年7月～9月

調査内容・方法：①個人情報(性別、年齢(6択)、学歴(5択)、勤務年数)、②吃音にまつわる現場での経験(8問)、吃音に関する知識(5問)について質問紙調査を行った(無記名式)。回答は多項選択法と自由記述を用いた。

なお、本研究は所属施設の倫理審査委員会の承認を得て実施された。

【結果と考察】

48名中、男性は1名であった。平均勤務年数は9.3年(SD = 8.3)、年齢層別の人数は23～29歳が最も多く、44%を占めた。保育中に子どもが吃っているのを見たことがないと回答した者が4名(勤務年数3年以内の者)あったが、43名は見たことがあると回答した(無回答1名)。吃音についての知識を問う項目では「よく知っている」が1名、「少し知っている」が28名と、半数以上が多少は知識があると思っていることが示されたが、その内容は必ずしも正しいものではなかった。また、吃音の子どもや周囲の子どもに対して、どのような対応をしたらよいか迷うことがあったと回答した者が13名(27%)いたこと、吃音の知識が必要かとの問いに対しては、22名が「非常に必要」、23名が「やや必要」と、全体の94%が「必要」と回答していることから、保育現場において吃音そのものや適切な対応の仕方に関する知識が望まれていることが示された。